

はじめに

古来「神主」は己に神を憑依させて人々に託宣（神の言葉や意思）を授ける者を言いました。しかし時代が下って現在のいわゆる神社神道と呼ばれる神道に属する神職は専ら形式に則った祭祀を執り行うことが活動の中心であることから、こうしたあり方が整えられる以前の頃のように「霊媒主義」（スピリチュアリズム）的立場をとらないのです。

それは筆者も同じことなのですが、これからお話しする内容は、すべて筆者の「気づき」に基づいたものであり、いわゆる神社神道の立場とはかなり異なる視座を持っています。まずはそれを断っておかねばなりません。以後自己紹介を兼ねて、筆者のこれまでの心の歩みについてご紹介を致します。

ただしこれらの心の自己分析は当然後になって行われたもので、その時代その時代の筆者が己の心を客観視できていたわけではなく、むしろその真逆で、逆巻き、荒れ狂う心の波に翻弄されていたというのが、ありのままの姿であることを冒頭でお伝えしておきます。

実を言うと筆者は中学二年生から三十代中盤くらいまで、自殺願望と希死念慮とともにありました。「死にたい」という思いを常に持ち、何をしていても死を思わないことはありませんでした。傍から見れば多くの友人を持ち、それなりの恋愛をし、安定した収入を得て、自由気ままに人生を謳歌しているように見えたかもしれませんが、心の裡は毎瞬毎瞬「死にたい」という思いでいっぱいな時期もありました。まさに自己の存在を否定していたのです。

そんな筆者が三十代に入り数年経ったころ、大きな変化が訪れました。それまで深い付き合いをしていた友人とブツンと縁が切れたのです。これをきっかけに特にトラブルがあつたわけでもないのに、この友人と全く関係がない交友関係のすべてを半ば脅迫的に拒否するようになりまし。これより以前は、少し離れた距離に住む地元の友人たちとも頻繁に会っていましたし、大学やサークルで出会った仲間、あるいは上京して親しくなつた友人など、本当に多くの人たちと関わって生きてきました。神社でのご奉仕が終われば、必ず誰かと会って食事をし、夜遅くまで酒をあおっているような生活でした。しかしそれが突然誰とも会わなくなつてしまつたのです。

そのような暮らしをするようになって半年近く経つたある日、衝撃的な出来事が起きました。そ

それは雷に打たれたとか、宝くじに当選したとか、超有名芸能人に会ったとかではありませんが、筆者にとって生涯忘れることができない体験でした。

それはいつもどおり神社のご奉仕が終わり、バイクでの帰路信号待ちをしていたときのことです。突如としてあることに気づいたのです。それが「あれ？　自分は今まで演じてきたのだ」という気づきでした。筆者は人と接するとき、「理想の私」という自分の中で作り上げた自分を演じながら生きてきたということに気づいたのです。

つまり「ありのままの私」では他人は取り合ってくれないという思い込みを持ちながら生きてきたということです。神社と家の往復を繰り返し、友人知人などと物理的に接する機会をなくしたことで、演じる必要がなくなったということです。それはまるで既にお客が去った劇場のステージで尚も演じ続けていた筆者が無人の観客席を見てハッと驚いている姿そのものだったと言えるでしょう。

あの寒い冬の日、この気づきによって筆者は初めて「本当の私」という存在を意識するようになったのです。

その後、なぜこの人間（筆者のこと）は、生きることそのものがつらく苦しいのか、なぜ慢性的な身体の痛みが癒えないのか、本当に私がやりたいことは一体なんなのかなど、それまで考えることがなかった、「私」という人物に対して興味を抱くようになりました。そのような中、誰に指示されたわけでもなく、自身の記憶している限りの過去の出来事、そのとき思ったことや印象に残る自他の言葉など、ありとあらゆる記憶を書き出す作業を始めたのです。このファイルを「はんせい記」と名付けて、徹底的に筆者のこれまでの人生を振り返りました。すると完全に忘れていた非常にネガティブな出来事の一つを思い出したのです。

筆者が幼稚園生のとき、家の近くで剣道教室が開かれることになったのです。筆者を含め地域の幅広い年齢の子供たちがこぞつてこの教室に入りました。しかしいざ教室が始まると、指導者の恐ろしい表情、竹刀の激しくぶつかる音、あちこちから聞こえる大きな声など、そのすべてが恐怖に感じられ、泣き通しで全く練習にならないのです。毎週この教室は開かれましたが、筆者だけ途中で帰ったり、何か理由をつけて休んだりという状態が続きました。最終的には無理やり出席したある日……やはり泣きじゃくってどうしようもなくなり、いつもは恐ろしい指導者に優しく抱きかかえられ、「これ以上無理ですね」と母親へと引き渡されたのです。

しかし、問題はこれからで、以後筆者は家でも地域でも剣道教室を辞めたヤツということ、まるで「前科者」のような扱いを受けるようになりました。特に地域の子供たちからは顔を合わせればそのことばかりを批難され、挙げ句の果てには全く面識のない者からもバカにされる始末でした。これが筆者の人生のかなり早い段階で迎えた大きな挫折だったのです。

筆者は「闘うことが怖い」という特性を持っています。剣道教室に限らず、人間同士が争うことを怖いと感じてしまうのです。こうした特性もあって、例えば激しく身体を動かしてボール遊びをする男児たちとは馴染めず、一人黙々と昆虫や草花を観察し、あるいは女兒たちとの会話を楽しむような子供でしたので、余計そうした姿が奇異に映り、批難や阻害といった不当な攻撃を受けるようになってしまったのです。

そうした状況の中で、筆者はある思い込みを抱くようになりました。闘うことが怖いという特性に対する解釈として、例えば「私は優しい」とか、「私は平和を好む」という解釈をすることもできます。もしこうした解釈をしたのであればその後の人生は大きく変わっていたのかもしれない、筆者は「私は弱い」と解釈したのです。

人間というのは実は「私」という存在のことをよく理解していません。そこで自身にさまざまに「ラベル」を貼り付けます。名前、学歴、職業、肩書きなどにとどまらず、例えば子供のころに親から「あなたはバカ」と言われれば、そのまま「私はバカ」というラベルを貼り付け、これを自己イメージの一つとします。これによって本来に力を発揮しなければいけない場面においてこの思い込みが作動し、本来の力を十分表すことができなくなってしまふのです。

今の例は親という自分以外の人間から発せられた言葉による呪いですが、筆者のように自分自身の特性に対してネガティブな解釈を行い、それに人生を支配される場合もあります。しかし、自己に対してどのようなイメージを持つのが、またその人にとって不都合な環境であろうが、人間はそれでも生きていかなければなりません。筆者の場合、闘いを恐怖し、自分は弱い存在であると感じていても、生きていかねばならないのです。

そこで筆者は「私は特別な存在である」と自他に対して、主張し、印象付けることで自分を守ろうとしたのです。現実社会で生じるさまざまな不当に対し毅然と立ち向かう勇氣、単に己の身を守るための正当な防衛行動がとれる人であれば、決してこのような生き方を選択することはありませんし、考えることもないでしょう。しかしそれができずに虐待を受け入れる者がこうし

た方法をとるのです。そしてこれが冒頭に述べた「理想の私」という人物を私自身が演じる始まりへとつながっていくのです。

筆者は以降、「この人（筆者のこと）は特別な存在なのだ」と周囲と自分自身に周知させていくことで身の安全を図ったのです。人間は根源的に安全を求める生き物ですが、筆者の頭の中は、自分が如何に特別で、偉大で、「あなたたち」（周囲）とは違う存在であるかということを示すことで完全に頭が満たされ、そしてそれを自らにも言い聞かせることで安全の確保を図ったのです。

そして、その延長として神主という道の選択がありました。筆者は中学二年生のときに既に神主になりたいという強い希望を持っていましたが、社家という慣習的に神社の祭祀を家職とする家に生まれた人間ではありませんでした。ですから、なぜ神主になったのかと質問されることが多いのです。特定の思想や宗教的背景をお持ちのごく少数の方を除いて、神社の神主というのはそれだけで尊敬され、特別扱いされるものです。一般の方は神主のさまざまな奉仕（業務）の中でも祭祀の部分に触れることが普通ですから、烏帽子を被って狩衣をまとい、笏を正す神主の姿を見ると多くの方が特別な印象を持つものです。私は弱いと思いついて筆者はこうした神

主という職業が持つ特別な力を鋭敏に察知したのです。存在するだけで特別扱いされるといことは、社会の中で繰り広げられるさまざまな戦いや、競争の外側にいられるということです。まさに筆者にとって神主になるという選択は己の身を守るための一手段だったというわけです。

しかし、人間は戦うことでしか強くなることはできません。社会という戦場から逃げ出した者に実力は身につきません。これが「理想の私」と「実際の私」との乖離を生み、人生そのものを苦しめる原因となるのです。

筆者は日本や皇室、神社や祭りを「理由なく好き」だと感じる特性を持っています。もう少し掘り下げて言うと、「精神面において、集団と一時的に一体となることを好む」特性です。これを現実社会において実現させていくことが筆者の使命です。但し、これは筆者を含め誰もが持つ「甘え」という心の働きを、向けるべき相手ではなく、社会に向けた結果、それを「使命」と勘違いしているとも言えるのですが、このことについては本書では語らないことにいたしました。話を戻すと、今まで見てきたとおり、筆者が己の身を守るために神主という職業を選んだのも紛れもない事実です。誰よりも志高く、情熱を持って神主をやっていると自負していた筆者が、た

だ身の安全を図るためにこの仕事を選んだという真実に気づいたのが三十四歳のときなのですが、そのときは全身の皮膚がヒリヒリし、気持ちもフワフワした状態が続いて、自分が自分ではないような感覚を味わいました。

こうした症状は一週間程度で落ち着きましたが、問題はこれからでした。神主は大勢の人がいる場所で祭りを行ったり、お話をしたりすることがあります。筆者はそうした場面は得意なほうでした。しかしそれが途端にできなくなり、更には祝詞を奏上していると緊張がピークに達し、喉が潰れて全く声が出なくなってしまうのです。薬を処方してもらい、周囲に迷惑を掛けながら一年近くはこうした状態が続きました。今にして思えばそれまで築いてきた自己イメージが崩れてしまったことが大きく原因していたと思っています。しかしこうした中にあっても、それでもこの生まれ育った日本という国を愛する気持ちを失うことはありませんでした。今まで積み重ねたものは崩れたけれど、この部分だけは決して揺らぐことはないと感じたとき、先の症状は和らいでいったのです。

冒頭に本書は筆者の「気づき」に基づいたお話になると述べましたが、その気づきとは右のよ

うな精神的・肉体的な問題を少しずつクリアにしていった先に得られたものです。かつての筆者を含め多くの人が、「朝」という時間を、「眠い」「忙しい」「憂鬱」のようにネガティブに捉えていると思います。

しかし、この朝というのは静かで、脳がリセットされた時間であり、生命のエネルギーが上昇する非常に神秘性の高い時間です。睡眠というのは単に身体を休めるためではなく、起きている間は「カタチ有るとき」、寝ている間は「境界のないとき」というふうに全く異なる性質を持った場面を歩き来しています。そしてこの二つの場面のはざまにあるのが朝というタイムングであり、目に見える現実世界からは受け取りにくいメッセージをキャッチしやすいときなのです。このような重要な意味を持つ朝というときに、筆者の人生における最大級の気づきが訪れました。それが、

「すべては一つだった、今はバラバラだが、やがてまた一つになる」

という気づきです。神の声として聞こえたとか、神秘的な体験を通じて得た言葉とかでは決し

てありません。単に寢床に仰向けになり、日の出間近らしい雰囲気るとき、夢と現（うつつ）のはざま、まさにまどろみのとき、右の言葉がスツと心に浮かんだだけです。しかしこの極めて短い言葉によって、筆者の人生観、世界観、宗教観、国家観などがガラリと変わりました。「なるほど、そうだったのか」と何度もこの言葉を反芻し、心を震わせました。

そして、この気づきを土台とし、特に神主という立場から今の日本人すべてに申し伝えるべき最低限の事柄を記したものが本書となります。本書は神主からのメッセージになるので、もちろん日本や神道について知識を得るといふ形で、理解を深めようとする方にとつての助けとなることとします。しかしそれとは別に、これら日本や神道が、本書を手にする読者の中に既に厳然と存在しているという気づきを促したいのです。そしてその気づきを得ることによって、日本人としての使命を自覚して活力ある人生を送り、また現在さまざま理由で精神的な苦しみを抱える人が、その苦しみから脱し、再び命輝く舞台へと躍り出てほしいという思いを込めています。是非最後までお読みいただき、あなたという存在がどれだけ尊く、重要な意味を持つ一つの命であるかという気づきと出会ってほしいと思います。